

## 2 ワープロとの出会い

1985（昭和六十）年春、在籍していた大学にワープロが導入された。初めてのワープロ体験を前に、私の心は迷っていた。

1977（昭和五十二）年春、4年間過ごした福岡県粕屋郡の障害児専門病院を退院することが決まっていた。退院した後は両親が先に転居している大阪に移ることになり、転校先は養護学校ではなく普通校を希望していた。

退院後、福岡市の児童相談所で10日ほど過ごした。3月末、次の施設が決まった。普通小学校に通える大阪府柏原市の養護施設だった。期待を胸に飛行機で大阪に向かった。施設に到着し応接室に入った途端に言われた。「ここは小学校までの距離が遠いので通学は無理で

しよう。養護学校が併設されている障害児療護施設を当たってみます」。私が大阪空港から柏原市の施設に向かっている途中に、先に到着していた母親と施設職員の方との応接室での話で決められていたのだ。3週間後、大阪府南河内郡の障害児施設に入園した。

養護学校の初日、今まで通り机上で字を書こうとした。が、手が震えて書けなかった。数日前の柏原市の施設では書いていたのに。環境の激変か、普通学校に通えなかったショックが大きかったのか。私は思わず床に正座し、鉛筆を持つ右手を両膝ではさんだ。やつと書くことができた。以後、床の正座姿勢が、私の筆記姿勢になった。

筆記には多くの時間と努力を要

した。試験や受験では、時間内に採点者に読んでもらえる字を書くのが一番の戦いだった。

大学でのワープロへの挑戦は、今までの字を書くことへの努力が無くなりそうに怖かった。しかし、教室の事務机上に置かれたワープロを初めて操作した時、迷いや恐怖は吹き飛んだ。

その時の思いをこんな詩にした。  
「表面（ディスプレイ）に映し出されている文字の下にどれだけ多くの間違い（打ち直し）が隠されているか君と僕しか知らないことだ」  
「これからも多くの努力が必要なことを機械の君が人間の僕に教えてくれる」

ワープロへの迷いはなくなっていた。